

# 秋の歌

白土康代（フランス文学）

十一月を「管から弦へと移る月」と歌った詩がある。十一月になると影の広がる速さが増し、空気が冷たくなり、花の色の濃さが目につくようになるが、そうした変化につれ、耳になじむ音も変化していくのかもしれない。そう思うと、秋をテーマにした曲には、管楽器より弦楽器のほうが似つかわしいような気がしてくる。

日本人に親しまれている「秋の日のヴィオロンのため息の」で始まるヴェルレーヌの「秋の歌」も、ヴァイオリンのすすり泣くような音と風に吹き散らされあちこちに舞う落葉の音を重ねているこの感傷的な秋の歌が戦争に使われたといえ、意外に思うだろうか。

「こちらロンドン、占領下のみなさんへ」で始まる「自由フランス」の放送は、ナチス占領下の人々をはげましたことで知られる。

明日こそ蜂蜜はブランディーになるだろう／サビーヌはおたふくかぜ／私はシャム猫が好き／ジャンの髭は長い／ブレスレットをした君は魅力的だ／トロイ戦争は起こらない

脈絡なく続く短文に続いて「秋の日のヴィオロンのためいきの」がラジオから流れると、レジスタンス運動家たちは耳をそばだてた。もし二節目の「身にしみてひたぶるにうら悲し」が読まれれば、二十四時間以内に、連合軍のノルマンディー上陸作戦が決行されるという暗号だからである。

連合軍が助けにきてくれる。アムステルダムのコダヤ人少女、アンネの隠れ家に貼られた地図にも、連合軍の助けを待ち望み、海岸線にそって旗が立てられていたことを思い出す。

身を潜め、「身にしみてひたぶるにうら悲し」が続くのじっと待っていた人々には、もの悲しい秋の詩を、希望の詩として聞く皮肉を感じる余裕はなかったに違いない。 （しらつちやすよ）

※ 出典

一般社団法人全国信用金庫協会 「楽しいわが家」 2017年11月発行